

「不動産屋なら不動産で稼げ」  
「管理職なら管理職らしくあれ」  
「今さら方向転換は無責任だ」

この思い込みが、人を壊す。変化に適応できないのではない。適応してはいけないと思込まされているだけなのだ。本業を、人生の主戦場と考えるほうがいい。そうでなければ、人は持たない。とりわけ現在は、リストラや倒産、希望退職など、“揺さぶりをかけられる仕掛け”には事欠かない。同じ組織、同じ業界・業種に人生を捧げるのは危険なことだ。そして、われわれはもうすでに、十分に消耗している。

## 本業を「主戦場」にしないという選択

本業は、もっと控えめな存在でいい。

- ・ 社会とつながるための居場所
- ・ 現場感覚を失わないための足場
- ・ 自分が何者かを説明しなくて済む入口

その程度で、ちょうどいい。

社会そのものもまた、大きく変わっている。営利企業であっても、かつてのように利益や技術のみを追求していればよい時代ではなくなった。地域との関係、倫理、説明責任、継続性。そうした要素を引き受けなければ、企業は社会から受け入れられない。

つまり、本業とは、個人にとっても、企業にとっても、「社会との関係を引き受ける入口」へと役割を変えつつあるのである。

## 入口はそのままに、役割を変えて生き延びる

私自身、「不動産屋」という入口を保ったまま、いわゆる不動産取引そのものからは距離を取りつつある。口の悪い者は「うまくいかないからだろう」などというが、そう単純な話でもない。むしろ、うまくいかない以外の理由が見つからないなら、かえってその場にとどまることに固執してあがき続けるだろう。

「本業」に携わるうちに、制度と制度の間で噛み合わなくなった話を調整する仕事。立場の違いから生まれる摩擦を和らげる役割。そうした周辺領域のほうが、自分には合っ